

研究科内公募プロジェクト

探究学習と大学の学習および将来展望とのレリバンズ

: 岡山県立岡山操山中学校・高校の 未来航路プロジェクトを事例として

代表 富田 知世 (比較教育社会学コース)

日下田 岳史 (同上・日本学術振興会特別研究員DC)

鈴木 翔 (比較教育社会学コース)

山口 泰史 (比較教育社会学コース)

指導教員 本田 由紀 (比較教育社会学コース 教授)

1. 本稿の目的

本稿の目的は、岡山県立岡山操山中学校・高校の総合的な学習の時間「未来航路プロジェクト」を事例とし、公立中高一貫校における探究的な学習に教師が期待する「効果」を、生徒も同様に認識しているのかを実証的に分析することである。

「未来航路プロジェクト」は次の3つの理由から、先駆的实践として位置づけることができる。まず、中高一貫教育を象徴する実践である。岡山操山中学校・高校は、2002年度に併設型県立中高一貫校として開校した。新設された岡山操山中学校では、特色ある教育内容として、「自己探求活動の充実(「たんきゅう」の漢字は「探究」ではない)」を掲げており、総合的な学習の時間を利用した「未来航路プロジェクト」の実施をうたっている(岡山県立岡山操山中学校・高等学校2001『操山』)。第2に、「未来航路プロジェクト」は、中学校・高等学校新学習指導要領で強調されている探究学習のモデルとなる実践である。そして、第3が、「未来航路プロジェクト」では、探究学習で設定するテーマと、大学での学習や将来展望に一貫性を有すること、すなわちレリバンズをもたせることが理念とされていることである。

本稿は、単なる実践事例紹介ではなく、教師の認識に基づきながら、実践の理念や実践上の困難

さについて理解する。また、未来航路プロジェクトを受けた生徒は、教師が意図した実践の理念どおりの「効果」を大学入学後に認識しているのかをアンケート調査によって明らかとする。さらに、教師の認識から見える、中学校と高校の未来航路プロジェクトの違いにも言及する。

カリキュラム・イノベーションが起こるには、新たな実践の具体的中身についての知識も当然重要であるが、それ以上に、新たな実践に対する教師の認識、生徒の認識にどのようなイノベーションが起こるのか、もしくは起こらないのかを考慮する必要がある。本稿は、カリキュラム・イノベーションを学校組織レベルから総体的に理解する材料を提供する。

2. 調査の概要

本プロジェクトの調査の構成は、未来航路プロジェクトの「効果」に対する教師の認識を明らかにする第1次調査と生徒の認識を明らかにする第2次調査から成る。

第1次調査として、教師の認識をとらえるため、本プロジェクトメンバーは岡山操山中学校・高校の教師に対する個別・複数名インタビュー(7月)、管理職や未来航路プロジェクト担当の教師との複数回の会議(6月~10月)、授業見学(10月)や資

料収集（学校訪問時）を実施してきた。これらの調査過程で未来航路プロジェクトの「効果」に対する教師の認識をとらえている。

第2次調査では、未来航路プロジェクトの「効果」に対する生徒の認識を明らかにした。岡山操山高校を卒業し、現役で進学・進級した場合、2012年度現在大学1～4年生に在籍している卒業生に対するアンケート調査を行い、把握を試みた。アンケート項目は、第1次調査で得られた、教師が認識する「効果」、もしくは期待する「効果」を反映させた項目となっている。本アンケート調査によって、未来航路プロジェクトに対する生徒（卒業生）が認識する「効果」を明らかにできると同時に、教師の期待との一致、もしくは不一致を示すことができる。

3. 第1次調査結果の概要

まず初めに、岡山県立岡山操山中学校・高校の教育理念と未来航路プロジェクトの関係について述べる。中高一貫校化当時、岡山操山中学校・高校はテストや数値で測れる「力」ではない「力」の育成を目指していた。岡山操山中学校・高校ではその「力」を育成する象徴的实践として、未来航路プロジェクトを位置づけている。そして、中高一貫校化当時の理念は、今も「異なる」形で教師の認識のなかに浸透している。岡山操山中学校・高校では、テストや数値で測れる学力、進学率、合格率とは異なる「力」について、教師たちは、その時々で「社会力」といった言葉や、「豊かな心」「高い志」といった言葉を用い、指し示してきていることがインタビュー調査からは明らかとなった。しかし、言葉が違っていても指し示す中身は、テストや数値で測れる学力、進学率、合格率ではない、という点では共通している。

次に、未来航路プロジェクトの学習内容を説明する。高校では次のような学習プログラムが用意されている。学習方法の習得、職業研究、話し方・聞き方学習（弁論）、大学学部・学科研究、ディベ

ート、異文化理解、進路系統別課題研究というプログラムを、左記にあげた順で2年生の1月まで行っていく。進路系統別課題研究が1年生の1月からスタートし、2年生の1月まで時間が用意されている。一方、中学校の未来航路プロジェクトは、高校で行われている系統別課題研究にあたる学習過程、すなわち探究学習に力点を置いた取り組みといえる。研究テーマは複数設けられ、そのテーマごとに探究学習も繰り返される。

未来航路プロジェクトは中学校と高校の両学校段階を越えた連続的实践となることが目指されている。しかし、中学校と高校の未来航路プロジェクトの実践には異なる点がある。教育課程上の時間数の違い、未来航路プロジェクトに占める探究学習の時間数の違い、学習環境・設備の違い、運営方法の違い、実践に対する教師の価値づけの違いの5点から説明できる。いずれにおいても、中学校のほうが高校よりも、充実、重要視されている実態だった。

最後に、7月に行った岡山操山中学校・高校教師へのインタビューから抽出した、学校の教育活動全体や、未来航路プロジェクトにおいて、はぐくみたい「力」に対する認識を説明する。インタビューで共通してみられた認識は、探究学習のテーマと大学の学習や将来展望を一貫させること、レリバンスを見出すことができる生徒を「望ましい」ととらえる認識である。この知見を、続く第2次調査のアンケート項目に反映させている。

4. 第2次調査結果の概要

第2次調査では、2009～2011年度岡山操山高校卒業生に対するアンケート調査を実施し（分析は4年制大学進学者のみ）、高校の未来航路プロジェクトの系統別課題研究の「効果」に対する生徒の認識を明らかにした。分析で得られた知見は、第1に、系統別課題研究の進め方として、専門的な情報収集行動をとっていた者ほど、志望と進学先が一致していると答えている、第2に、岡山操山

高校の未来航路プロジェクトは大学の学習とレリ
バンスをもつ、そして第3に、岡山操山高校の未
来航路プロジェクトは大学卒業後の将来展望を考
えるのに役立つという実感が必ずしもあるとは言
えない、という3つである。

5. まとめ

第2次調査の第1、2の知見で重要となった未
来航路プロジェクトの変数とは、専門的な情報収
集行動であった。しかしこの学習行動はすべての
生徒に対して均一に機会が割り当てられているも
のではない可能性がある。専門的な情報収集行動
をとれる機会を、すべての生徒に与えることがで
きる施策が望まれる。

調査の設計上、明らかにできなかったことがあ
る。第3の知見が見出される際、大学卒業後の将
来展望と直接の関連を持つのは、高校が直接働き
かけることが難しい条件だった。それは本人が生
来的に持っている固有な性質の場合と中学までの
義務教育の成果である場合が考えられるがいずれ
の解釈が妥当かはわからなかった。同様に、内進
生／外進生の違いが、大学の学習、将来展望との
レリバンスに直接的に影響を及ぼすことは認めら
れなかった。この結果は、高校において内進生と
外進生の「差」がなだらかになっているのか、内
進生が中学校段階までの成果を高校で活かしてい
ないのか、どちらを意味しているのかはわからな
い。詳細な調査は今後の課題としたい。